
不可視の同居人

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不可視の同居人

【Nコード】

N2658B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

依頼人は一人暮らしの女子大生。彼女の部屋では次々と不可思議な現象が起こるといふのだが。消えたベルト、消えた親友、アパートの床に刻まれた謎の古語。これらの意味するものは一体？日本狼の妖し叶利と霊能力者；御霊谷実嗣のシリーズ。

- 序 -

「もういいかい？」

幼いころの記憶で一番古くて、しかも唯一のものは築百年余りと言われる純日本家屋の実家のたたずまいと、そこで行われる一人ぼっちの隠れん坊。

一人ぼっち？

ううん。思い出せないだけで、それは間違っている気がする。

「ヤナちゃんたちってば隠れん坊下手ね」。すぐに音出しちゃうんだもん！」

実家はとても古い家だったので、最近の家みたいに明るい照明はなかった。薄暗くてただっ広い畳敷きの屋敷のなかには、図らずも沢山の闇が存在していた。

そんな、子供にとっては恐ろしかったであろう家のなか、幼い私は一人で留守番を言いつけられてもちつとも怖くなかった。

と言うよりむしろ楽しんでいたような覚えすらある。

うちの田舎は過疎化が進み、遊び相手になってくれるような同年代の子が近所にいなかった。一人で外に出ても余り楽しくなかったし、屋内にいるときのほうが胸躍る何かがあった気がする。

それはきつと、時折フラッシュバックする台詞のなかの、「ヤナちゃんたち」という存在に関係しているんだろう。

今はそれがどんな子たちだったのか、そうして何故外を思い浮かべてもその子たちとまるで結びつかないのか、全然思い出せないけれど――。

古ぼけた、鉄筋コンクリート製の建築物。

カビの生えた大きなチーズを思わせる、六階建ての二階に位置するワンフロアーをテナントとして借り受けて早四年半。

看板に偽りなし！のはずなのだが、肝心なその文句が胡散臭くてイマイチ客足が思わしくない。

スピリッツ・マスター

【霊媒師 怪異に関すること、全て賜ります。除霊OK。分割払いても受け付けます】

「世の中そんなに平和とも思えねえがなあ」

ぼんやりと窓外を見遣りながら、三白眼の青年が溜め息交じりにそうつぶやく。

梅雨時ということもあって、空はどんよりと鈍色にひいろに染まり、湿り気を帯びた重苦しい空気の合間を縫うように、糸みたく細い雨が地面を濡らしている。

路上には、様々な色の傘が花を咲かせていた。

「マスター、そんなことばやいてる暇があったら掃除でもしたらどうですかい？」

部屋の中央に位置するデスクの辺りから半ば呆れたような声が掛かる。

見れば、机の上にとっかと胡坐をかいた男が一人。

一人——？

いや、よく見れば耳が獣のそのようだし、ご丁寧にフサフサと毛の生えた尻尾まで付いている。おまけに目の下からあごにかけて左頬を縦断する傷痕まであるのだから何とも面妖だ。

「叶利かなき、お前は俺の何だ？」

フンツと鼻息も荒く、窓辺に立つ青年が問い掛ける。

「何って……『使い』じゃないですかい。お忘れになったんで？」
きょんとした顔で、叶利と呼ばれた半獣人が答える。彼、実は
日本狼の妖しである。

彼と、窓辺の若者の関係は、というと主人と従者と言ったところ
だ。

術者である窓辺の青年——名を御霊谷実嗣みくりや さねつぐという——が主人で、
妖したる叶利が従者。

歴然とした霊力の差が、二人の関係をそんな具合にしまった
のだが、従えられている叶利のほうが無理ではなさそうなので、何
とかうまくいつている。何事も、力だけで押さえつけるには無理が
あるのだ。

「分かってるんじゃない。そういうことだ」

どうやら実嗣、自分に指図するなど言いたいらしい。

（つたく、二十三にもなって、マスターはどうしてこんなにも大人
気ないのかねえ）

そんな風に思った叶利であったが、面倒なので口には出さない。
ここ数年で、彼なりに実嗣について学習したつもりだ。

思えば叶利が実嗣に出会ってから、かれこれ五年以上が経ってい
る。その頃の実嗣は、学ランに身を包んだ高校生だった。

異形である叶利が変化しないのは当然として、実嗣の成長には目
を見張るものがあつた。どこか幼さを残していた面差しも、今では
立派な成人男子のそれだ。彼が叶利の外見年齢——二十代後半——
を超えるのも、そう遠い未来ではあるまい。

しかし、それに精神面が伴っていないのが困りものなのだ。

（しゃあねえなあ）

力ない溜め息をつく、叶利は部屋の隅にあるロッカーを目指し
た。なかには掃除用具が一式入っている。

部屋の片隅や、書棚なんかの上だけならともかく、叶利が今まで
座していた机の上ですら、吹けば飛びそうなくらい埃が積もってい
た。

ロッカーから新品の雑巾を一枚取り出すと、オフィスの一角にある給湯スペースへと向かう。そこは、当然のこと水道も完備していた。

適当に雑巾を湿らせると、叶利は心ばかりの掃除を開始した。

真新しい雑巾は最初水の含みが悪かったけれど、すぐにそんなこと気にならなくなった。サツと一拭きしただけでその面は真っ黒になり、何度も何度も洗わなければならなかったからだ。

雑巾を洗いながら、ふとたらいに張られた水に映った自分の姿を見て、所帯じみている情けないな、などと思ったりもしたが、今の時勢、妖しだからといって家事が出来ないようでは女にモテない絶滅種であることからくる種族維持本能故か、無類の女好きたる叶利である。そう言うところのチェックには余念がない。

「あ……」

掃除が大方片付いたかな、というところ。ぼーっと窓外を眺めていた実嗣が妙な声を発した。

「どうかしたんですかい？」

その声に、雑巾を手にしたまま叶利が窓辺に近付く。

実嗣の肩越しに覗き見た眼下には、自分たちの居るビルの前を右往左往している人影があった。傘の可愛い花柄模様から判ずるに、うら若い女性と思われる。

「やрийい！」

その様を見るなり、叶利がニヤリと微笑って勢いよく指を鳴らす。

「ここに用があるとは限らねんだぞ？」

叶利の喜びように、水を指してやろうという魂胆見え見えの様子で実嗣が口を開いたのだが。

「チツチツチツ！ 甘いですが、マスター。あの様子からして、絶対ここに用がありますって、彼女は！」

即座に反論されてしまった。

確かに叶利の言う通り。

古ぼけたビルとはいえ、この建物のなかに入っているテナントはそれなりにまともなものばかりなのだ。

まず、一階にあるのは明るい雰囲気のごんまりとした花屋だし、三階以上はそれこそまともな——例えばすぐ上の税理士事務所などのように——会社の事務所となっている。

一階に花屋があるお陰で古い建物であるにも関わらず、ビル全体が辛気臭くならず済んでいるのも事実だ。

しかし、そのなかにあつて二階に位置するここだけが、一種独特な辛気臭さを醸し出している。

「確かにそうかも知んねえけどな、女と決め付けるのは早すぎやしねえか？」

何としても叶利をがっかりさせてやりたいのだろう。実嗣が、負けじと言い返した。

「マスター、俺様の鼻を見くびってもらっちゃあ困りますぜ？ この鼻に賭けて誓いやす。あれは女！ それも相当の別嬪さんでさあ！」

雨もガラス窓も度外視してそう言い切る叶利に、さしもの実嗣も完敗だ。それに、叶利の言うことは十中八九正しい。あの傘で男とすることはほばないだろうし、何といっても叶利は、自他共に認めるフェミニストだ。

そうこうしている間に、下の彼女（？）も決心がついたらしい。

傘を力強く握り直すような動きをしたあと、しっかりとした足取りで花屋の右手横にある階段へと近付いて行った。

「ほい、どうぞ」

思いつきり上機嫌な男が、今にも歌い出しそうな声音で湯気のくゆる湯飲みを応接テーブルの上に置いた。

湯飲みを間に挟んで真向かいに座る三白眼の青年は、彼とは対照的に思いつきり不機嫌そうな顔だ。でも、お茶を出してくれた男はそんなこと、いっかな意に介してはいないようだ。

先ほどここへ座す直前にお互いが交わした自己紹介とともに渡された名刺を信じるなら、この目つき険しい青年の名は「御霊谷実嗣^{みくりや さねつぐ}」。

てつきり、その後にもう一人の男性（従業員？）も紹介してもらえろと思っていたのに、あてが外れてしまった。

実嗣は彼を、自分と余り関わらせたくないみたいだ。もしかしたら、一見取っ付きやすそうな男の左頬にある、大きな傷痕が原因なのかも。あんなに大きな怪我をするなんてこと、普通の生活ではちよつとありそうにないし。

そんなことを思いながら、ちらちらと二人の青年を見比べる。

まさかその男が、そんなもの比にならないような隠しごとをしている——尻尾と犬耳を普通の人間に見えるように化け直している——だなんて思いもよらない彼女だったが、叶利に対して怯えを抱くには、その見た目だけで十分だった。

出されたばかりの湯飲みと実嗣、それからニコニコ顔の男を順番に視界の端におさめつつ、頭の中はフル回転だ。

実嗣に促されるままソファに着席してみたものの、何となく話を切り出し辛くて軽い膠着状態に陥っている。

もしかしてここへ入ったこと自体が間違いだったのかも。

そんな風にくじけそうになる心をグツと抑え、腿の上に乗せた手に力を込めた。

「咲良ちゃん、だっけ？ マスターが機嫌悪そうなのは気にしないでいいですね？ 生来こんな顔なんっすから」

その仕草を目ざとく見つけられてしまったらしい。自分——高塚咲良——が固まっている原因を、一方的に実嗣の不機嫌顔だと決め付けた傷あり青年が、ニツと笑ってみせた。

浅黒い肌に銀色の短髪。

今まで傷にばかり目がいつて気付かなかったが、彼の持つ特徴は何もそればかりではなかった。

どこか日本人離れた外見を持つその男は、よく見ればとても人懐っこい雰囲気をもとっていた。

傷痕だけで「怖そうだ」と判断した自分が少し情けない。

「叶利、お前は黙って座ってろ」

どうやら叶利、というのがその男の名のようだ。

相変わらず不機嫌そうにムスツとした表情のまま、実嗣がそう告げると、

「へーいへい」

気の抜けた返事とともに叶利と呼ばれた男が、事務所の片隅で胡坐をかいた。

この事務所、とても綺麗に掃除されているようなので床にも埃はないみたいだが、どこの世界に椅子ではなくフローアー——しかも日ごろ土足で行ったり来たりしているような——に座る人間が居よう？

叶利の突拍子もない行動に、咲良は思わず瞳を見開いた。

「叶利！」

途端、その視線に気付いた実嗣の一喝で、叶利が慌てて椅子に座り直す。しかし、その仕草もどこかぎこちなかった。

「驚かせてごめん。あいつ、山育ちだったから……その、名残なんだ」

今までずっと、実嗣からピリピリした雰囲気ばかりを感じ取ってしまっていたが、案外そうではないらしい。

咲良に向かって申し訳なさそうに苦笑いをする実嗣からは、思っ

たほど剣呑な空気は感じられない。

もしかしたら話の糸口が掴めなくて参っていたのは自分だけではなかったのかも？

「あの、彼、外国の方なんですか？」

それに安堵した途端、疑問に思っていたことがつい口を割って出てしまった。

「……え？」

余りに唐突すぎるその質問に、実嗣が間の抜けた声を出してきよとんとする。

その表情を見て、咲良は顔から火が出そうになってしまった。

「……す、すみません！ 私ったらいきなりっ！ ちょっと気になっってしまったものだからついっ……」

しどりもどろな口調で何だかんだと言いつきを並べる咲良に、実嗣が一瞬、ふと和らいだ顔をして微笑んだ。

彼の、苦虫を噛み潰したような仏頂面に慣れていた咲良は、余りに意外なその表情に思わず見惚れてしまう。

「……奴はアルビノだから」

そんな咲良の視線に気付かない様子で、実嗣がそう説明してくれた。それに安堵すると同時に新たな疑問が首をもたげる。

「……でも、あの、アルビノって色素がないんじゃない？」

咲良の記憶が正しければ、アルビノとは生物等に起こる突然変異の一種だったはずだ。白化固体とも呼ばれ、ネズミやウサギ、ヘビなどといった様々な生き物に見られる現象で、正常な体色を表す遺伝子が変化し、色素を形成出来なくなったために生じる遺伝子突然変異体を指す言葉だったと記憶している。

「気になってんのは叶利の肌が黒いつてことかな？ ありや日焼けだよ。あいつ、体育会系だから」

しかし実嗣は、咲良の質問に対して取って付けたようにそう即答した。まるでその質問には慣れっこで、あらかじめ模範解答が用意されていたかのような……そんな印象を受ける言い回し。

「そう、なんですか……」

何となく腑に落ちなかったけれど、咲良は一応に納得した振りをした。

それに、実際自分が抱えている問題に、叶利がアルビノであるか否かは関係ない。咲良にはもっと別に、話さなければいけないことがある。

「――で？」

「え？」

唐突に転換された話題についていけなくて、今度は自分が間の抜けた声を発する番だった。

「俺が言うのも何だけど……こんな所に来るってことは……普通に相談出来ない悩みごとがあるってことなんだろう？」

どうやら話さなくては、という自分の気配を察してくれた実嗣が、あえて水を向けてくれたらしい。

依頼人に対して発するには少々不躰とも取れる言い回しだが、不思議と腹は立たなかった。

「あの、こんなこと言ったら私、その、おかしな奴だと思われてしまいかも知れないんですけど……」

せっかく実嗣が話すきつかけを作ってくれたのだ。これに乗らなかつたらきつとこの先一生、誰にも相談できない。

そう思った咲良は、しどろもどろではあるが言葉を選びながら話し始めた。

今まで色んな友人に同じように話して変な顔をされてしまったことが、無意識のうちに聞き手の反応を伺ってしまうような口調として現れてしまう。

「俺もマスターもお嬢さんのこと、おかしいだなんて思ったりしやせんぜ？」

それを察してくれたのか、叶利が気遣うようにそう言うてくれた。その言葉に、実嗣も無言でうなずく。それを見て、咲良は正直ホッとした。

この人たちになら話しても大丈夫かも。

そう思った咲良は、腿の上のこぶしをもう一度力強く握り直すと、顔をあげて話し始めた。

「そう、です、よ、ね。私ったらここまで来て何イジイジしちゃってるんだろ。私、もう、貴方がたしか頼れる人が居ないんです。：

…だから、信じます！ ……実は――」

部屋に入ると、一斉に何かがざわめく。

それが何なのか、咲良には皆目見当が付かない。でも、確かに何かが、いる。

夜中に突然起こされたこともある。

いきなりドォーン！という、下から突き上げるような音がして、その後窓ガラスが激しく揺れた。それは、寝転んでいても体感できるほどの衝撃だった。

「昨日、すごい地震があったね」

翌日、同じアパートの隣室に住む親友、高木アカネにそう言ったら変な顔をされた。

アカネは大学に入って一番親しくしているクラスメートだ。

高塚と高木で、名字を五十音順で並べたとき近かったため、出席番号が前後になったのが縁だった。

入学してすぐ、大学主催で一泊二日のオリエンテーションがあり、そのときの部屋割が出席番号で決められていた。それで同室になった二人は、正反対の好みを持つ服装の話やなんかで盛り上がり、意気投合したのだ。

オリエンテーションへの心がけ、と題して一日目の朝に先輩達の体験談が語られた。その多くはここで仲良くなった友人が四年間の友になると言ったもので、それが嘘ではないことを、咲良は身をもって経験する。

咲良もアカネも遠方からこの大学に通うようになった者同士。新生活と慣れない地、という寂しさも手伝い、すぐに打ち解けることが出来た。

どちらかと言えば引つ込み思案でおとなしい咲良と、活動的で何事に対しても積極的なアカネ。

却って真逆なことが良かったのか、互いにないところを補い合い

ながら、二人は楽しい学生生活を送っていた。

咲良一人では絶対に行かないであろう映画も、アカネと一緒になら楽しめた。

服を買いに行っても何となく気後れして試着せずに買っていた咲良だが、それ故によく失敗しては「あゝあ」となっていた。筆筒の肥やしになっている数着の服を見せながら苦笑したら、アカネは「そんなことじゃ駄目だよ」と笑った。

それからシヨッピングの際、咲良が気に入った服を見つけたなと察すると、アカネは店員に「試着させてもらえますか？」と聞いてくれた。

アカネと一緒に居ると、ぐんぐん引つ張られることが多くてときに怖い気もしたけれど、大抵の場合、人よりも大人しめの咲良には丁度良かった。

アカネに出会ってから、咲良は如何に自分が色んなことをチャレンジせずに諦めていたのかを知った。

咲良は、姉御肌のアカネを尊敬していたし、アカネのほうもそんな自分を変化させていくことを楽しんでいるように思えた。

そんな、今では学内でダントツの友人である——と咲良は思っている——アカネに変な顔をされて、内心戸惑った。

「一時ごろだよ？ あっちゃん、もしかして寝てた？」

あんなに凄い揺れだったのだ。起きていて気付かないはずがない。

「一時ごろ？ あたし、完徹で今日提出のレポート書いてたけど……地震なんてなかったよ？」

もしかして、からかっているの？

そんな表情で友人が告げる。

（からかっているのは、あっちゃんのほうだわ）

正直そんな風に思った咲良だったが、こんなことで喧嘩をするのも馬鹿らしいので言わずにおいた。アカネ、基本的には優しいのだが、意見が食い違った場合絶対に譲らない意固地な一面を持っている。

特に最近彼氏が出来てからは、アカネのその態度は顕著になったと思う。

それでもどうしても納得がいかなかった咲良は、折を見て別の友人にも問うてみたのだ。

「ね、昨日、地震があつたよね？」

けれども誰一人としてうなずいてくれる人はいなかった。そんなことがもう何度も続いている。

「咲良、まだそんなこと言ってるの？ 地震なんてなかった言っただじゃない。あたしのこと信じてくれないなんて咲良らしくないよ？ 絶対に変。本当、大丈夫なの？」

アカネが心配顔でそう言ってくれたけれど、その台詞のなかにさえ、どこか棘のようなものを感じてしまい、咲良の心は一向に晴れない。

（嘘なんてついてないのに…… どうして誰も信じてくれないの？）
余りにもそんなことが続いたため、咲良はクラスで浮いた存在になつてしまった。アカネ以外のクラスメートが、陰で自分のことを何と言っているのか知らない咲良ではない。

「高塚さん、絶対おかしいよ。最近高木さんに彼氏が出来て余り相手してもらつてないみたいだし、ただ単にみんなの気を引きたいだけなんじゃない？」

クスクス笑いながら冷やややかな視線が注がれる。

アカネはそんな咲良を庇うようにクラスメートたちを牽制けんせいしてくれるのだが、最近ではその親友にすら、ちょっぴり疲れた雰囲気けんきが漂っている。

皆が言うように、アカネが彼氏のことですぐ一杯で、実際のところ自分にまで気を配るゆとりがないだろうことは、咲良にも何となく分かった。

もしかしたら彼氏とうまくいっていないのかも知れない。

このままでは大切な友人を失うことになるかも。

そう思うようになってからの咲良は、以前にも増して口数の少な

い子になった。

だから地震以外に経験した、細々（こまこま）とした怪現象について、咲良は誰にも相談したことがない。

一つ一つはとても些細なことで、取り立てて騒ぐほどのことでもないと思っただからだ。もちろん、地震のときに皆に相談して馬鹿にされたから言わずにおこう、と思っただのもある。

曰く――。

確かに閉めたはずの鞆のチャックがいつの間にか開いていたり、部屋に一人で居ると名前を呼ぶ声が聞こえてきたり、片側の肩だけが妙に重く感じられたり……。

そんな感じで、毎日色々不可思議なことが続いている。

しかし、先に述べたような理由で、咲良は誰にもそれを相談しなかった。もちろん、アカネにさえも。

そんな風に自分を殺していることが、時々無性に寂しくなることがある。

そんなとき、咲良はアカネがくれたベルトを取り出して眺めるようになっていた。

「咲良、これ、気に入ってたでしょ？ お古で悪いんだけど……まだそれほど痛んでないし、良かったら使って？」

オリエンテーションの日、アカネがつけていた白い皮ベルト。

バックル部にターコイズがあしらわれたとても凝ったデザインで、すごく可愛く見えた。

控えめな性格を反映するように、アクセントある服飾小物を持っていなかった自分と違って、ボーイッシュで活動的な格好の似合うアカネ。そんな彼女への憧れも手伝って「いいね、可愛いね、私もそういうの、うまくファッションに取り入れられるようになりたいな」。そう言っていたのを覚えていてくれたのだろう。

「勝^{まわ}にね、たまには咲良みたいに女の子らしい格好をして欲しいって言われちゃって。これを機にこういうの、卒業しようかなって思ってるの」

彼氏の名を告げて、はにかんだ笑みを浮かべたアカネ。

一度だけ会ったことのあるアカネの彼氏はちよつと軽薄そうな感じのする、今時の青年だった。

アカネがトイレなんかに行って席をはずすたびに「ねえねえ、咲良ちゃんには彼氏、居ないの？」としつこく聞いてきたのが印象的だった。ついでに、アカネのどこが好きなのかと再三問いかけられたのもよく覚えている。面倒だったので「タイプが正反对だから合うのかも」と曖昧に言葉を濁した咲良に、そうなんだ、と笑いながら手を握ろうとさえした男だ。

正直苦手なタイプだったけれど、アカネの幸せそうな顔を見てみるとそんな風に思ってしまう自分が嫌にも思えた。

「咲良、今度あたしの服、選んでね」

今まではアカネに引つ張られてばかりだった自分に、彼女がそう言ってくれたときは本当に嬉しかった。そのときは勝とやらに感謝すらしたくらいだ。

アカネと自分が仲良しなのは、お互い持っていないものに惹かれているから、という理由だけではないはずだ。その証拠に、こんな風に歩み寄ることで、一層仲良くなることだって可能なんだから。

「うん。じゃあ、あっちゃん、代わりに私の服、選んでね」

アカネと同じ話題で盛り上げられることを夢見て、とっても嬉しかったのを今でも鮮明に覚えている。

結局、そう約束をしてから随分経つが、彼氏に夢中のアカネは咲良と出かける機会がガクツと減ってしまった。

言うまでもなく、ショッピングは実現していない。

クラスメートのささやき合う、「相手してもらってない」というのは的を射ているだけに心にずっしり重かった。

咲良の手持ちの服には、そのベルトは似合わない。それで、まだ一度も身につけたことがない。

そんなベルトを眺めていると、幸せそうに微笑んでいた、仲良しだったころのアカネを思い浮かべることが出来る。

気が付くと、咲良は無意識にベルトを見詰めていることが多いな
った。

でも、そんなときに限って「サクら、サクラ」としわがれたよう
な呼び声が微かに部屋を渡るのだ。

その後で、ドンツと突き上げるような衝撃がくることにも、最近
では慣れてきた。

そして、その揺れが、決まって咲良からベルトを遠ざけてしまう
ことにも。

声の主は、自分とアカネの友情を邪魔なかしたいのだろうか？ それ
でなくとも脆くなっているというのに――。

大切なベルトを手の届かないところに押しやられることは、咲良
にはそうとしか思えなかった。

そんな折である。

クローゼット前の床に、鋭利な刃物の様なもので引っ搔いた文字
が刻まれたのは――。

「これなんですけど……」

携帯電話のカメラで、その文字を写したものを実嗣に差し出しながら、咲良が溜め息をつく。

「それを見て、このままじゃいけない気がしてずっと悩んでいたんです。そしたら……」

ぼおっとしていてアパートの階段から足を踏み外してしまったという。

薄手のブラウスの袖口をまくり上げて包帯の巻かれた腕を見せると、咲良は再び溜め息をついた。

むき出しにされた包帯の下からほのかに湿布の余香が漂う。雨で窓を締め切っているせいで、それは一層色濃く室内に残った。

その臭気に、眉間にしわを寄せる叶利。湿布とか歯磨き粉とか、とにかく鼻につうーん、とくる系の香りは余り好きじゃない。

いくらいいい女でも、この異臭を放っているうちだけは勘弁してくれと思ってしまう。

さつきまではブラウスによって少しだけ臭いが遮断されていたみたいだ。

それにしても……。迂闊にも久々の女の色香に浮かれすぎてしまっていたらしい。

先ほど実嗣に自分の鼻について自慢したばかりだったのを思い出して、無性に腹立たしくなってしまうた叶利である。

咲良や実嗣に聞こえないようにチツと舌打ちすると、少し拗ねたようにそっぽを向いて座り直す。

それでも耳だけは澄まして咲良の言葉を捉えようと努力した。

「二、三日放っておいたんですが一向に腫れが引かないのでお医者さんへ行っただです。そこで怪我をした理由を聞かれて……。ぼおっ」と歩いていったって言ったらその先生、すごく親身になって話を

聞いて下さって……。最後にここを勧められたんです。自分の知り合いの子がやってるからって」

腕の包帯をさすりながら咲良が言う。

（行潦のヤローだな）
にわたすみ

心のなかでつぶやく叶利。

自分とは少し離れた場所で、応接セットに腰掛けて彼女の話聞いてる実嗣の表情を見て、彼も気付いたらしいことを知る。

それを見たらなんだか無性に腹が立った。

にわたすみ
行潦響。

学生時代は不良少年で通っていた実嗣が、兄のように慕っていた外科医の名。

実嗣の生家——すなわち御霊谷家^{みくじや}——は共働きの家庭であつたため、彼は幼いころからお隣である行潦家^{にわたすみ}にちよくちよく預けられていたという。

それには行潦家が自営業（町医者）だったことも多分に関与していた。

帰っても誰もいない、一人ぼっちの生家より、行けば優しく出迎えてくれる誰かがいる隣家のほうが、幼い実嗣にとって居心地が良かったのは言うまでもない。

そんな具合に幼少時代を過ごしてしまったため、実嗣は自分の家よりも行潦家で過ごした時間のほうが多かったと聞いている。

隣には今でも実嗣専用の食器一式が置いてあるくらいなのだ。

そのせいか、実嗣は今でも響（と、その姉の若菜）のことを本当の兄姉^{きょうだい}のように慕っている感がある。

響たちの言うことならば大概のことは不平不満を言わずに聞くし、彼らの前では借りてきた猫のように良い子でいたりもする。

三白眼でいつも不機嫌そうに見える実嗣が、行潦家でのみ見せる子供っぽい表情に、叶利自身何度ギョツとさせられたことが。

そのたびに、実嗣が自分にはまだ心を開いてくれないのではないかと不安になったりもする。

そんな具合に揺れる気持ち、いつの間にか怒りへと転じ、その矛先が——とりあえず姉「女である若菜には向かず——響へと向いていったのだ。

端的に言えば、叶利は他のどんな男よりも響のことが嫌いだ。

ある意味ヤキモチを焼いている、とも言える。

何だかんだ言っても、自分にも子供っぽいところがあると思うのだが、そこには気付いていない振りを決め込む。

根本的にどんな美形でも、叶利にとって男という種は——マスターたる実嗣以外——全て忌むべき存在だ。

自分が一人でも多くの子孫を残そうとするならば、ライバルになる可能性のある世の男どもはみんな抹殺すべき敵である。

そんな風に思っている叶利だから、同じ空間を共有している女性の口から他の男の名が出ると、にわかに機嫌が悪くなる。

昔——実嗣と出会う前——の叶利ならば、こんな時は腹いせに出会う端から男たちを喰らっていたかも知れない。でも、今は何とかこらえている。そんなことをしたら後で実嗣にどんなお仕置きをされるか分かったものじゃないからだ。

「百聞は一見にしかず、ですぜ？ マスター。今からでもお嬢さんのお宅に伺いましょう」

響の名が出たことで俄然やる気が出てきたのか——はたまた単なる対抗心からか——勢いよく椅子から立ち上がると、ガッツポーズでニヤリと笑う叶利。

思い立ったら吉日。

即実行！

実嗣が叶利のことを「体育会系」と称したのは満更嘘ではなさそうだ。

何やら張り切りモードな叶利の様子に、咲良も自然と緊張がほぐれたらしい。

「来て頂けますか？」

真っ直ぐな視線で二人を見つめると、期待に満ちた声音でそう言

つ
た。

咲良の住むアパートは、実嗣のオフィスと車で十分と離れていないところにあった。

この辺りは近くに文学部系の女子大があるため、その学生たちをターゲットにしたアパートが目立つことで知られている。

近くの不動産屋を覗いてみれば、その中の大半の物件が同じような条件で、若い女の子向けの作りをした様々な部屋を提供していることが分かるだろう。

そんなわけで、通称大学町と呼ばれているここ一帯。

そんな町の一角に、咲良の住むアパート——ファミール彩^{あや}——は建っていた。

「わあ。何か女の園って感じでワクワクしやすね」

如何にも女性受けしそうなレンガ造りの五階建てを見上げて、叶利が嬉しそうに顔をほころばせる。

建物の見た目からだけでなく、叶利には彼女たちの発する甘いフェロモンのようなもので嗅ぎ取れてしまう。時折鼻をヒクヒクさせながら、この上なく幸せモードだ。

実際、このアパートは、その立地環境から入居者の大半が女性なので、叶利の鼻も満更捨てたものではない。

依然小雨は降っているのだが、駐車場からアパートの入り口まで数メートルしかなかったので傘はささないことにした。

実嗣と暮らすようになるまでは、野山で野生児のような生活を営んでいた叶利である。

濡れる、ということに対して人間とは多少感覚がずれている。

そんな叶利だ。

今から人様の家に入るのだから、余り濡れるのは困る、とかそんなことに思い至るはずもなく——。

小雨のばらつく空の下、のんきに立ち止まる叶利の横で、実嗣が

不機嫌そうにしているのにも気付けない。

そんな対照的な二人の様子に、咲良が思わず吹き出した。

「かあゝなあゝきいゝ！」

咲良に笑われてさすがに恥ずかしくなったのだろう。実嗣が、叶利の髪を思い切り引つ張って怖い顔をする。

「イテテテッ。すいやせん！ マスター、俺が悪かったす！」

毎回同じようなことをして、同等の目に遭わされているくせに、叶利にはいっかな学習能力というものが備わっていない。

ムスツとした面持ちで叶利から視線をはずすと、咲良に向かって頭を下げる実嗣。実嗣、案外律儀な性格なのだ。

外見とはそぐわぬその行動に、咲良は逆に恐縮してしまった。

「……あ、わた、私の部屋は二階ですっ」

しどろもどろな口調でそう告げると、ぎくしゃくとした足取りで建物の入り口をくぐる。

正面入口を入ってすぐのところにエレベーター、斜め前方に階段が見える。

「へえゝ。最近の女子大生ってえのはリッチすねえゝ。ここ、エレベーターまで付いてんですかゝ」

叶利が驚嘆したのも無理はない。

自分達のオフィスが入っている建物は、ここより一階分高い六階建てだが、エレベーターなどという文明の利器は完備されていないからだ。

実嗣よりも頭一つ分背が高い叶利は、一番後ろを歩いていても前方の様子がよく見える。加えて視力も並外れて良いので始末に負えない。何のために最後尾を歩かされているのか、分らないところがある。

叶利の台詞に、振り返り様にキツと鋭い視線を向ける実嗣。頼むから喋らないでくれと顔に書いてある。

叶利にとって、マスターたる実嗣に嫌われるのは望ましいことではない。下手をすれば傍に置いてもらえなくなるかも知れないから。

珍しく、長い間ひとところに身を置きすぎたせいかな、その日暮ら
しで寢床を確保するのは、今の叶利にはとても億劫なことに感じら
れる。

実嗣の視線にシユンとすると、これ以上要らぬ言葉を発さないよ
う、自らの口に手をあてがった。これで何分持つか自分でも自信が
ないが、まあ、誠意は汲み取ってもらえるだろう。

二人に続いて無言でエレベーターに乗り込むと、好奇心をグツと
抑えて、実嗣の頭越しに見える事故時の注意書きに集中する。

しかし、それがいけなかった。

たった数秒の浮遊感だったのに、叶利は見事に酔ってしまった。

「ましゆたあゝ、俺、何か頭ぐるぐるして気持ち悪いっすうゝ」

エレベーターから降りると同時にその場にへたり込んだ。

驚いたのは実嗣である。

ほんの束の間エレベーターに乗っただけで、気持ち悪いだとおー
っ!?

背後から聞こえてきた情けない声にびっくりして振り返ると、叶
利が真っ青な顔をしてしゃがみ込んでいた。

「あ、あの、叶利さん、大丈夫ですか？」

実はいつもは部屋が二階なのでエレベーターではなく階段を使っ
ている咲良。今日は叶利がエレベーターに興味を示したのでそれを
使うことにしたのだ。それなのに。

聞こえてきた二人のやり取りに、咲良も何だか責任を感じてしま
っているように見えた。

眉根を寄せて心配そうに叶利を見詰める。その表情に、心底申し
訳ないような気がしてしまった実嗣である。

そういえば、忘れていたが叶利は乗り物に弱かった。いつぞや車
に無理矢理乗せてほんの三十分連れ回したら、見事に酔ったことを
思い出す。

今日、ここまでの道のり車で来たのに平気だったのは、すぐに目

的地に着いたこともあるだろうが、咲良——女性——が同乗していたことが大きいだろう。

それに、実嗣は思いもよらないことだが、叶利は響への対抗心で燃えていたりもしたのだ。

「俺のミスだ。あんたのせいじゃない」

そんな諸々の事情を失念していたのは——叶利本人も悪いだろうが——やっぱり主人としての自分に責任がある。

だから彼女に気を遣わせるのはお門違いなのだ。

こめかみのところに人差し指をあてがうと、絞り出すようにそう告げて頭を下げる実嗣。

なおもうつむいて唸っている叶利を一瞥すると、ふとあることに思い至って更に深く溜め息をつく。

「叶利、お前、もしかして文字でも見てたのか？」

酔いやすい体質の者が、乗り物の中で文字など読むものではないことは言わずもがな、だ。

実嗣の指摘に力なくうなずくと、その途端口を押さえて呻く叶利。うなずいた反動で、危うく吐きそうになったらしい。

「アホか、お前」

そんな叶利に、ボソツと吐き捨てるように実嗣が悪態をつく。しかし、その言葉とは裏腹に、叶利のことを心配しているのが感じられた。

「すいやせん……」

それを知ってか、いつになく素直に謝る叶利に、実嗣の表情がふつと和らいだ。

「叶利、いいこと教えてやる」

「……？」

「手え出せ」

しゃがみ込んで視線を叶利のそれに合わせると、実嗣は叶利の右手をグイッと引っ張った。

その仕草にきょとんとする叶利をよそに、実嗣は言葉を続ける。

「手のひらにな、こーやって『人』つつう字を三回書くだろ。それをな……」

叶利の手を自らの口許に持って行ってコクンと喉を上下させる。

「こんな風に飲み込むと酔いが醒める」

普段、ムスウーツとした顔をしている実嗣だが、間近で見ると臥せられたまつげが思いのほか長いことが分かる。

それに、何となくドギマギしてしまった叶利に気付いているのかわからないのか。

臥せていた目を上げて、真正面から叶利を見詰めると、「分かったか？」と問いかける。何故、叶利が真つ赤な顔をしているのかわんて、恐らく理解の範疇を超えているだろう。

「あのお、でも、それって……緊張しないようにするおまじないじゃ？」

何だか親密な雰囲気で展開されていく二人の間に入れなかった咲良が、遠慮がちにそう尋ねたのは、二人が見詰め合ってからきつかり二十秒後のことだった。

案外生真面目なところのある咲良。どうしても間違いを正しておきたかったとみえる。

そんな彼女の台詞に苦笑すると、実嗣は叶利の傍を離れた。

「問題ないよ。どうせ気休めだし」

チラリと叶利を一瞥すると、そう告げて意地の悪い笑みを浮かべる。

「ひつでえ、マスター！俺、今、本当に信じてたんつすよ！？」

そう叫んで立ち上がったから「おやつ？」という表情をする叶利。それもそのはず。先ほどの気分の悪さが嘘のように消えていたのだから。

「な？効いたろ？」

クスクス笑いながら実嗣が問いかける。

病は気から。つまりはそう言うこと。

人の何倍もの回復力を誇る、妖したる叶利が、乗り物酔いぐらい

でそんなに長時間へたばっていらるはずがないのだ。

だとすれば、酔って気持ちが悪いという自己暗示が、気分の悪さの原因だと考えるのが妥当だろう。

そう考えた実嗣は、その病の一番の薬が、そんなものすぐに治ると信じ込ませるもう一つの暗示だと思いついたのだ。

仲が悪そうに見えて、本当はお互いのことをよく分かっているらしい二人の様子に、咲良は改めて感心させられた。

「どうぞ」

通された咲良の部屋は、玄関を入ってすぐがキッチンで、真つ直ぐ突き当たって奥が脱衣所や洗面所、それからシステムバスになっていた。

フローリングの洋間は、玄関から見ると左手側——西側——を曇りガラスの引き戸でキッチンと仕切られた奥にあった。

洋間は南側がバルコニーに面していて、北側がロフト、その下のスペースに作りつけの机があるといった、よくあるタイプの1LDK。

調度品は咲良の雰囲気によく似合う、女の子らしい淡い色のものがほとんどで、なかでも薄桃色の花柄カーテンは彼女によく似合っていた。

物も割と少なめで、机の棚にちよこちよこつとマスコットなどの小物が飾ってあるだけ。雑多な感じが全くしない。

それは、雑誌などに掲載されていても違和感を覚えないうつ、センスある落着いた雰囲気のござっぱりした部屋だった。

件のクローゼットは、すぐに分かった。

洋間の西面が全てそれに充てられていたからだ。

それを見て、やはり女子大生を意識した作りだな、と感心する実嗣。狭い部屋だが、洋服などの収納スペースが広く取ってあるのが如何にも若い女の子向けだ。

きつとこの部屋の売りは、省スペースに一役かっているロフト&机の組み合わせと、このクローゼットの収納力だろう。

それなのに——。

大家が見たらさぞかし嘆くであろう、無残な姿を晒しているクローゼット前の床。

そこには咲良が言ったように、釘か何かで引っ搔いて付けたよう

な傷跡——文字——があつた。

「おもへどもへだつる人やかきならん身はくちなはのいふかひもなし」

ところどころ変体仮名混じりで書かれたその文言を、さすが^{よわい}齡数百年と言うべきか、叶利がサラリと読み上げる。

「で、どういう意味なんだ？」

読めたんだから当然意味も分かるだろう、といった調子で実嗣が問いかける。

「さあ？」

中途半端な知識である。

「最近そんな言葉、ほんと使いやせんし」

読めたくせに意味は忘れてしまったのだ、と頓珍漢な言い訳をする叶利に、実嗣が溜め息をつく。使わないという意味で言えば、変体仮名だって廃れてしまっているのに。

「役に立たねえ奴……」

腹立たしいのでそう吐き捨てる。

「読めただけでも上等じゃないっすか」

それに反論して叶利がぼやいた言葉が至極まともで、それがまたム力つく。

「あの、それで……これって……」

二人を居間に通した後、一人キッチンへお湯を沸かしに行っていた咲良が、恐る恐る会話に加わった。

「……？」

と、同時に疑問符満載の顔を二人から向けられて戸惑ってしまう。

「あ、その……、これを書いたのは人間ですか？ それとも……」

そう言われて彼女が何を言いたいのか合点した実嗣。

「少なくとも人間じゃねえな。お前もそう思うだろ？」

人間であればストーリーカーか、もしくは彼女に何らかの恨みを持つ

た者の嫌がらせの線を探らねばならない。

しかし――。

「人間の臭いはしやせんし、それに」

犬のように鼻を文字に押し当ててクンクン嗅いでから、

「微かですが妖気も残ってやす」

ニタリと微笑^{わら}ってそう断言する叶利。

そんな叶利の奇行を見て、またも咲良が目をまん丸にする。

「叶利……」

なおも四つん這いのままでいる叶利に、低い声でけん制すると、自らもしやがんで文字に手をかざす実嗣。

そこでふと思いついたように口を開く。

「つかぬことを聞くんだけど……咲良ちゃん、小さいころに引越しかしてない？」

「え？」

余りに突然の問いかけに、叶利への興味を殺がれる形になってしまった咲良が、きょんととして実嗣を見詰める。名前に「ちゃん付け」されたことにも気付かない様子だ。

「え、ええ……。私が小学校に上がる前になるんですけど、父の提案で」

咲良が幼少のころを過ごした家はかなり辺鄙なところであって、町まで出るのに車で優に二時間弱を要した。

町と村を結ぶ唯一の道路はクネクネと曲がりくねった隘路^{あいろ}で、峠をひとつ越えねばならないとても不便なものだった。

途中運悪く対向車と出会ってしまったら、離合するのに数十メートルないし数百メートル後退しなければならない。

今でも年に数回両親に連れられて田舎に帰ることがある咲良だが、今なら分かる。あの悪路を、毎日行き来するのは決して楽ではなかっただろう、と。

それでも父は、咲良が幼いうちは毎日のようにその道を使って通

勤していたのだ。やって出来ぬこともなかっただろうに、咲良の小学校入学を目前に、突如引越しを言い出したのにはわけがあった。咲良が通う予定になっていた小学校が、山を二つ越えた先の部落まで行かねばなかったからだ。もし、そこへ通っていたとしたら、その年の新入生は咲良一人きりだったらしい。

子供の足では山二つ越えの通学は到底無理だったし、不幸なことに母には免許がない。

当時は学校運行のマイクロバスなんて素敵なものもなかった。

畢竟、そこへ通学するとなれば父の助けが必要になったのだが、自分の通勤だけでも峠越えに二時間近くかかるのだ。勤め人の父が毎日咲良を送り迎え出来るかと問われれば否、と答えるしかなかったのだろう。

父が、咲良の小学校入学を機に、町へ出ようと言ったのも、得心がいく。

「最初は祖母も一緒に、って話だったんです。でも頑として嫌だと言いつて。老人を一人残して町に出るのは心配だしってことで、話が難航したらしいんですが」

驚いたことに祖母は笑って「わしは一人じゃないけえ」と言っただけ。だから気にせず行ってええよ、と。

両親は当然、祖母の言葉を世迷言だと思ったのだが、咲良だけは「そうだね。大丈夫だよ。みんながいてくれるもんね」とニコニコしながら断言したという。

後に母からそう聞かされた。

「……でも、どうしてそれを？」

「ま、ちよつとね」

咲良の問いに曖昧な返答をすると

「引越し前の家って相当古くなかった？」

妙に確信した顔をして、実嗣が更に言い募る。

咲良の生家は実嗣が指摘した通り、築百年余りのとても古い家だ

った。

でも、それは今回のこととは関係ないので実嗣には話していない。
なのにどうして知っているのだろう？

疑問符満載で眉根を寄せつつうなづく咲良に、実嗣はなおも続ける。

「もしかして咲良ちゃん、引越すより前の記憶が余りなかったり？
したり顔で一氣に色々言い当てる実嗣に、咲良はますます困惑する。

「は、はい。ほとんど覚えていません。でも……どうして？ 私、
そんなところまでお話してないのに——」

実際、咲良には幼いころの記憶——殊に小学校入学以前のもの——
がほとんどない。

そこまで告げて、咲良は先日帰省した折に母と交わした会話を思い出した。

「咲^{さく}ちゃん、小さいころお引越しの話が出たとき、おばあちゃんは
一人じゃないから古い家に残っても大丈夫だって言ったの、覚えて
る？ みんなって誰のことだったの？」

そう問われてハツとしたのだ。

尋ねられるまで幼い日の自分がそんなことを言ったのすら忘れて
いた咲良に、幼少のころの思いなど残っていようはずもなく——。

「ごめんなさい。私、小さいころのこと、あんまり覚えてないの」
そう告げたら

「そっか。昔のことだもんね。忘れていても仕方ないか」

母は一瞬悲しげな顔をして淡い笑みを浮かべたのだ。

咲良が小さいころの記憶で唯一引つ張り出せるのは、薄暗い実家
で催される一人ぼっち（？）の隠れん坊のみ。

それにしたってどこか模糊としている。

いくら小さかったとはいえ、もう少し覚えていることがあっても
良さそうなのに。

悲しげな顔をした母を見て痛切にそう思った。

咲良がそこまで話し終えたところで、キッチンからお湯が沸いたという、ピーーという音が聞こえてくる。

「すみません」

別に謝る必要はないのだが、ペコリと頭を下げると、咲良はいそいそと台所へ駆けていった。

「どう思う？」

咲良がキツチンへ姿を消したのを確認すると、実嗣は小声で叶利に話しかけた。

「何か相当危なくねえですかい？」

それに応じながら、叶利が眉根を寄せて鼻をひくつかせる。

「やっぱお前もそう思うか」

二人してクローゼットを見つめながら、自然難しい顔になる。

「何ちゅーか生臭いっすよね、こん中……」

床上の引っかき傷と、クローゼットから漂う異様な気配。

二つは似て非なるものだと思っと思う。

「とりあえずお嬢さんにはしばらくここ、出てもらったほうが良くないっすか？」

「それで時間、稼げると思うか？」

「……いや、多分無理でしょうね」

そこまで話したところで、咲良が姿を現した。

「あの、紅茶淹れたんですけど」

ひそひそ話をしている二人に恐る恐る問いかける。

「お、サンキュー」

叶利を促してクローゼット前から咲良が勧める丸テーブルのところにへ移動すると、目の前に熱々のティーカップが置かれた。

立ち昇る湯気に乗って、ダージリンティーの香りが鼻腔をくすぐる。

その匂いに、何となくティーバッグの紅茶ではない気がして、実嗣は無意識に背筋を伸ばした。

叶利のほうは、かぐわしい紅茶よりも茶請けに出されたクッキーに心奪われている様子だ。

液体より腹持ちのする固形。これには叶利なりの信念があるよう

なので、実嗣は何も言わないことにしている。

「……それで、私、どうしたらいいでしょう？」

紅茶の湯気を見つめながら、咲良がポツリとつぶやいた。

その声に、実嗣と叶利は思わず顔を見合わせる。

「御霊谷さん、先ほどの様子だともう何かお分かりになられたんじゃないかと思って」

二人の視線を受けた咲良がうつむいて視線をさまよわせる。

「実嗣でいいよ」

その表情に不安なんだな、と感じた実嗣はなるべく言葉を選びながら口を開いた。

「大体はつかめたよ。けど……まだ絶対っていう裏づけがない。正直何点か不明なところもあるし。で、もし差し支えなければ……その……クローゼット中、見せてもらいたいんだけど……」

クローゼットや箆笥の中には女性の秘密が詰まっている気がする。そこを覗かせてくれ、というのは何となく気が引けた。

実はこう見えて実嗣、それほど女性経験が豊富なほうではない。だからこれを言うのはそれなりに気合が要ったのだ。

「やっぱ無理かな、と続けようとしたら

「あ、はい」

案外咲良は呆気らかんとしたものだった。

ティーカップを卓上のソーサーに戻すと、

「今すぐご覧になれますか？」

真っ直ぐ実嗣を見つめ返してきた。

余りに潔い即答に一瞬動きの止まる実嗣。

そんな彼に、叶利が苦笑しながら助け舟を出す。

「折角淹れてもらった紅茶が冷めちゃもったいないですし、これ飲み終わってから見せていただきやす」

ニヤリと笑ってそう告げた。

クローゼットを開けると、中は部屋同様整然と整頓されていた。

もつと沢山の服や鞆なんかがギュウギュウ詰めに入っているのかな、なんて思っていた実嗣は正直拍子抜けしてしまった。

「私、余り衣装持ちじゃないんです」

実嗣の表情を察したように咲良がそう言って微苦笑する。

「あ、いや、そんなこと……」

思っていない、と続けようとしたが顔に出ているのだ。言えば言うほどドツボな気がして実嗣は語尾を濁した。

「で、この下の箱には何が入ってるんですかい？」

そんな実嗣とは裏腹に、叶利は堂々としたものだ。

咲良の肩越しに、クローゼットの床上に置かれた小さな白い箱を指差す。

それは、何と切り出したらいいのか戸惑っていただけで、実嗣も気になっていたものだ。もつと言えば、クローゼットを検めさせてもらった一番の目的はこれを見せてもらうことだった。

「あ、これは」

ちよつと照れたように箱に手を伸ばすと、咲良は「おや？」という表情になった。

「どうしました？」

背後から咲良の手元を覗き込んだ叶利が、怪訝そうな顔をする。その声に、実嗣も咲良の手元へ視線を移した。

「この中にはベルトが入っていたはずなんですけど……」

見れば、箱の中は空だった。

「とつても大切なものだったんです」

今にも泣きそうな顔をする咲良の手から叶利がそつと箱を引き取る。

「きつと見つかりやすよ」

人懐っこい笑みを浮かべてウインクすると、箱のにおいを嗅いでから

「俺、鼻が利くんつすよ」

ニヤリと微笑^{わら}う。

もともとが日本狼の妖しなので、叶利の発言は嘘ではない。

「俺は手のひらで妖気なんかを感じるんだけど、こいつのセンサーは鼻なんだ」

当たり前障りのない説明。

怪異に遭遇している咲良だ。

きつと叶利の正体は人間ではないと告げても信じてくれただろう。でも、わざわざ混乱を大きくする必要はない。

叶利とは違う、ちよっぴり品の良い営業用スマイルで微笑むと、
「大丈夫。俺たちが見つけてやる」

実嗣も太鼓判を押した。

二人にそう言われて、咲良の顔に少しだけ表情が戻る。

「とっても大切な友達がくれたベルトなんです。だから……何としても取り返してください」

ちよっとお門違いなお願い事かもしれないが、クローゼット前に文字を残した者が関与していると考えたのだろう。「見つけ出して」とは言わず「取り返して」と告げた咲良の目には、ひたむきな光が宿っていた。

手近なところに立つ実嗣の手を握ると、下から見上げるようにして懇願する。

された相手が叶利だったなら問題なかっただろう。

でも、相手は見た目によらず初心^{うさ}な実嗣だ。

途端真っ赤になってしまつて、咲良も自分の大胆な行動に気付く。

「あ、ご、ごめんなさい！」

慌てて実嗣の手を離すと、こちらも真っ赤な顔をしてオロオロと視線をさまよわせた。

その様を見て、叶利が嬉しそうににんまり笑う。

「春っすねえ」

思わずそう口走つたら、

「今は梅雨だ……っ！」

至極まともな訂正とともに実嗣から拳骨を食らう羽目になった。

現状のままアパートに残るのは危ないと実嗣に言われた咲良。

「どうしよう……」

はつきり言って迷った。

一人でこの部屋にいるのは確かに怖い。

最近ではここに帰ると何ともいえない息苦しさすら感じるからだ。

「しばらく友達の家にも泊まらせてもらえないか？」

神妙な面持ちをした実嗣にそう問いかけられたが、咲良は力なく首を横に振ることしか出来なかった。

咲良にとつて一番仲の良い友は言うまでもなくアカネであり、その彼女とは現在音信不通が続いている。

少し話す程度の顔見知りならば何名か思い浮かぶけれど、泊めてもらえるほど親しくしている子はいない。

寂しそうにうつむく咲良を見て、叶利が「いつそのことうちに来てもらったらどうですかい？」と提案したのだが、これには慌てて首を振ってしまった。

さすがに会ったばかりの——しかも異性の——家に厄介になれるほど咲良はスレてはいなかったから。

それで、結局一人でこの部屋に留まってしまう羽目になった。

一人になる咲良を気遣った実嗣からもしものときのために、と護符と灰色に光る一条の物を収めたベルトの空箱を手渡された。

「蓋は絶対開けるなよ？」

それが何を意味するのか咲良には分からなかったけれど、「必要なことだから」と言われて黙ってうなずいた。

今はそれを、うずくまるような格好でひざに抱えて座っている。

明日は彼らと一緒に田舎の生家を訪ねる予定だ。

それも、今回の件には必要らしい。

「詳しいことはそのとき話すから」

実嗣の提案に、きょんとして見返したら、そう告げられた。実嗣たちが帰ってから、うずくまったまま咲良は色々考えた。

もしも長期戦になりそうだったらその足で実家に寄り、しばらく厄介になろうかな、とか。

しかし、そんなことをしたら両親に心配をかけてしまうと思い至り、溜め息がこぼれるだけだった。

「あっちゃん……」

こんなとき、アカネがそばにいてくれたなら、どんなにか心強いのに。

実嗣たちが帰る直前、咲良は彼らと連れ立って、すぐるような気持ちで隣室のチャームを鳴らしてみたのだ。

でも、依然留守のままです。

携帯にも何度かかけてみたけれど、結局応答もなければ、かかり直してくる気配もない。

「あっちゃん、どこへ行ってしまったの？」

こんなときに一番相談したい相手が居ないというのは辛かった。目の縁に溜まる涙がこぼれ落ちそうになるのをまばたきしないようにして必至でこらえる。

空になってしまったのは箱の中だけではないような気がした。

「……寂しいよ……」

はからずそんな弱音が漏れる。

どうしてさつき、自分は叶利の申し出を断ったりしたのだろう。ぐずついた天気も手伝い、いつもにも増して薄暗い影が宿る部屋に一人取り残されてみると、それはひどく心細いことのように思えた。

しとしと止め処なく降り続けている雨も、咲良の落ち込んだ気持ちに拍車をかける。

そのとき、だった。

チャイムが薄暗い部屋には不似合いな、軽やかな音で来訪者を告げたのは。

「俺たちが外に出て扉を閉めたら朝になるまで何があっても玄関や窓を開けないように」

途端、しつこいぐらい何度も念押しされた実嗣のセリフを思い出してビクリとする咲良。

部屋や家にはそれだけで一種の結界があるのだと言う。閉ざされた状態では、普通の者は簡単に中に入ることが出来ないらしい。

空間の主に招かれざる者は、皆一応に結界に拒まれるからだ。

時間をかければこじ開けて入ることも可能だが、それは相当に力を持った妖しにしか出来ない諸行なのだそうだ。

だから一番手っ取り早い方法として、外の者たちはあの手この手で中から招き入れてもらおうとする。異形の者達がその辺の策に長けているのは言うまでもない。

そんな話を聞かされていたので、突然鳴ったその音に、心臓が痛いくらいの早鐘を打つ。

でも、次の瞬間もしかしたらアカネが戻ってきたのではないかと
思い、居ても立っても居られなくなった。

誰がいるのか確認するぐらいなら。

そう思い、手にした箱をそつと床に下ろすと、咲良は忍び足で玄関に出た。そうしてドアの覗き穴から息を殺して外を見遣った。

しかし、そこにはチャイムを鳴らしたはずの人影が見えなくて――

予期せぬ事態に戸惑う咲良。と、同時に薄れ掛けていた警戒心が
一気に膨れ上がった。

（居留守……）

脳裏にそんな考えが過ぎ^よったけれど、足が震えてうまいこと後退
できない。一刻も早く玄関から遠ざかりたいのに！

（どうしよう……っ）

この穴、外から覗いても向こうからは室内の様子は見えないはずだ。でも、何となく視線を感じてしまうのは何故だろう。

そんな、曖昧模糊とした恐怖で、咲良は玄関先にへたり込んでしまった。

——もし何かあったら連絡して。

うるたえる頭の片隅で、名刺に記された実嗣の携帯番号がちらりと浮かぶ。

電話も名刺もリビングだ。

這うようにして家の奥を目指しながら、咲良は心の中で「助けて」と念じずにはおられなかった。

ピンポン、ピンポン、ピンポン。

咲良の恐怖心を掻き立てるように、続けざまにチャイムが鳴らされる。

その音が怖くて思わず両手で耳を覆おうとしたら、

「咲良あゝ、いないの〜？」

聞き慣れた声がかかった。

「あっちゃん……！？」

正直、凄くホッとした。それと同時に一気に手足から力が抜けていくのが分かる。

今こうしてアカネが訪ねてきてくれたことがこんなにも心強く感じられてしまうのは、先ほどまでの恐れの裏返しだろう。

アカネの声を聞いた途端、戒めが解けたように言うことをきくようになった足で扉に駆け寄ると、咲良はいそいそとロックをはずしにかかった。

と、そこで一瞬ためらってから、そおつと覗き穴から外を確認する。

先ほどまでは何も見えなかった空間に、今はちゃんとアカネが立っていた。

「……あっちゃん、一人？」

それでも先ほど感じた違和感が払拭しきれない咲良。扉を挟んで恐る恐る問いかけてみる。

「……ん？ もちろん一人だよ〜？」

アカネの間延びした声音に、咲良の緊張が一気にほぐれた。

「ごめん。今開けるから待ってね」

実嗣からは絶対に開けるな、と言われていたけれど、アカネが来てくれたんだから大丈夫だろう。

色んな緊張からか、じつとりと汗ばんだ手でドアノブをつかむと、

咲良はゆつくりと扉を開けた。

「こんにちは。久しぶり、だね……」

顔を出すと同時に申し訳なさそうにそう告げたアカネが、うかがうように咲良を見つめる。

「うん。そうだね」

アカネにいらぬ心配をかけたくなって適当な相槌をうつと、

「あっちゃん、大丈夫？ 何だか顔色が悪いよ？」

気が付くままに友人を気遣った。

「あゝ、やだなあ。やっぱり出ちゃってるんだねえ……。……実は咲良と逢ってない間、色々あってさ……」

言いながらチラリと部屋の中に視線を飛ばすアカネ。

「玄関先で話すのも何だし、よかったら入らない？ 久しぶりにゆつくり話そうよ！」

そんな彼女に、咲良は慌ててそう提案した。

「うん。ごめんね、いきなり押しかけてきたくせに……」

うなずきながらアカネが入ってくるのへ、「気にしないで」と返しながら、咲良は玄関の扉にロックをかけた。

実嗣たちにしたのと同じようにダージリンティとクッキーをテーブルに置くと、咲良はアカネの前に腰を下ろした。

「……何か緊張するね」

久々過ぎてどう接したらいいのか考えてしまう。話したいことは山ほどあるはずなのに、どこから話したらいいのか分からないというのが本当のところだ。

それに、目の前のアカネは久々に再会した友人というより、余り馴染みのない人みたく、どこか違和感があった。

「だね」

咲良の言葉につこり笑ってうなずくと、アカネはフロアーに置き去りにされた箱に目を留めた。

「そう言えばあれに合う服を一緒に買いに行こうって約束してたよね。ごめんね。まだ行けてなかったね」

「え、あ……うんっ！」

中身がなくなってしまったただなんて言えやしない。

「咲良、一回ぐらいいは付けてみた？」

出された紅茶に手を出すことなくそう問いかけてくるアカネに、

咲良は曖昧な笑みを返す。

「ま、まだなの。手持ちの服に合うのがなかったから……」

これは嘘じゃない。

咲良が持つおとなしめの服には、あのベルトはインパクトがありすぎて似合わなかったから。

「そっか……」

ちよっぴり残念そうに声のトーンを落とすアカネに、咲良は話題を変えようと思った。

「あっちゃんこそ女の子らしい服買おうねって約束、果たせてないけど……その後どう？」

アカネはベルトに似合う服を咲良に、咲良はアカネに清楚で乙女チックなコーディネートをすることを約束していたのだ。

「えへへ。私も、まだ……。勝がなかなか離してくれなくって」

そう言ったアカネの目が、言葉とは裏腹に笑っていないように見えたのは気のせいだろうか？

「じゃ、今度一緒に行こうね。勝さんがあっちゃんと離れたくないって言うんならいつかみたいに三人で一緒に行くんでもいいし」

ふと気になりはしたけれど、アカネに合わせて笑顔を作ると、咲良はそう提案した。

本当はアカネの彼氏とは好んで行動をとみにしたくない。一度しか会ったことはないけれど、何かにつけてアカネと咲良の仲の良さを探ろうとする勝が苦手だったから。アカネがいなくなると馴れ馴れしくなる彼の態度も正直好きになれなかったし、その延長で咲良に彼氏がいなかったのかしつこく聞き出そうとしてくるデリカシーのなさも嫌だった。

でも、アカネが彼と自分との間で板ばさみになって辛いのであれば、譲歩してもいいと思った。

そう思ってた他意のない言葉だったけれど、その瞬間、アカネから憎悪のこもった目で睨まれた気がして、咲良は少し慌てる。もしかしたらアカネは、自分が勝に気があると勘違いしているのかもしれない。

勝の、咲良に対する態度から判ずるに、彼は相当な浮気性なのかも。

そこまで考えて、咲良は冷や汗をかく。

「も、もちろんあっちゃんが嫌ならいいよ？」

私、あっちゃんの彼氏にちょっかいを出す気はありません。

言外にそう含ませたつもりだけど、伝わっただろうか。

焦る気持ちを誤魔化すように紅茶に手を伸ばすと、酷く口が渴いているのを実感した。

緊張する……。

冷めた紅茶を一気に飲み干すと、咲良は恐る恐るアカネに視線を戻す。

以前のアカネはこんなオーラをまとった子ではなかったはずなのに。

この違和感は何だろう。

ドキドキしながら空になったティーカップ越しにアカネを見遣ると、いきなり彼女が爆笑し始めた。

「何、焦ってるの？　咲良ったら変！」

こうして笑うといつもものアカネだ。

変なのはあっちゃんなのに……。

そう思ったけれど、アカネが笑顔になってくれたことが嬉しくて、咲良は一緒になって笑う。

ひとしきり笑って静かになったところで、アカネが真剣な顔になって切り出した。

「ねえ、咲良。正直に答えてね？」

「う、うん」

何を聞かれるんだろう。

思わず生唾を飲み込む。喉がカラカラなのに気付いたけれど、紅茶はさつき飲み干して空っぽだ。

「咲良は勝のこと、どう思ってる？」

やっぱり来た！

案の定、アカネは自分と勝のことを疑っているのだ。

「……どう、って……。別に何とも！」

誤解は解いておかなくちゃ。思わず語尾に力が入る。

「じゃあ、私のことは？」

「え？　あっちゃんのこと？　凄く大切に思ってるよ！？　掛け替えのない人だっと思ってる！　私、あっちゃんのこと、好きだもん！」

必死になって答える。

勝さんのことは何とも思っていないせん。私にとって大切なのは貴

方のほうです。だから貴方を裏切るはずはないでしょう、と。

「……そう」

そう答えて立ち上がったアカネの輪郭が歪んで見えるのは何かの間違いだろうか？

「そうなんダあ……」

ゆらり、ゆらり、ゆらり。

身体を前後左右に揺らしながらアカネの姿が変わっていく。

「……あっちゃんっ!？」

怖い！

すぐに立ち上がってその場から逃げ出したいのに、お尻に根が生えてしまったみたい動けない！

震えながら、それでも視線だけは外せずに目を瞠る咲良。その眼前で、アカネの身体がどんどん伸びていく。

その様はうねくる蛇に似て――。

「た、助けて……」

テーブル上に置かれた携帯に手を伸ばそうとしたら、物凄い勢いでアカネに払い落とされた。

否。目の前のものはもう、アカネではない。

「さあくくうくうらあ」

しゅうしゅうと空気の漏れるような声で名前を呼ばれる。

その声に、咲良は怖くて耳を塞いだ。

もう、恐怖で目も開けていられない。

そうしながら、心の中で必死になって実嗣と叶利の名を呼ぶ。本

当は声に出して助けを求めたかった。叫んだところで聞こえるはずはないけれど、そうすることで何かが変わる気がしたから。

でも、情けないことに咲良の口はガタガタと震えるばかりで声なんて出せそうになくて。だから心の中で必死に叫んだのだ。「助けて!」と。

耳元に、アカネだったものの吐く呼吸を感じながら、咲良は実嗣の言いつけを守らなかつた自分を心の底から呪った。

- 11 - (前書き)

一応「使い」というシリーズのお話です。

この話と同じキャラが登場する「使い」、「勘違い」も掲載中です。
もしよかったらそちらもチェックしてみてくださいませ。

勿論、どのお話も単独で読んで何の問題もありません。

とりあえず咲良のアパートを出てはみたものの、やっぱり傍を離れる気にはなれなかった実嗣と叶利。

咲良のアパートからさほど離れていないところにある公園脇に車を停車し、何となく待機の構えだ。

「……腹、減ったなあ」

いつもなら家で夕飯を食べている頃合だ。

車のオーディオに内蔵されたデジタル時計をチラリと一瞥すると、ぼそりとつぶやく。

「何か買って来ようか？」

助手席のシートを目一杯倒してダッシュボードの上に足を投げ出していた叶利が、実嗣の言葉に反応してそう提案する。

「おう。頼もつかな」

いかにも待つてました！といった表情を浮かべると、ズボンの後ろポケットから財布を取り出す実嗣。

と、そこで動きが止まった。

「解けた！」

チツと舌打ちして険しい顔になった実嗣に、叶利も無言でうなずく。

「俺、先に行きやす！」

言葉が聞こえるか聞こえないかのうちに、叶利の姿は助手席から掻き消えていた。

「そこまでだ」

首筋を這う生臭い臭気に首をすくめて縮こまっていた咲良は、その声と同時に禍々しい気配が遠退いたのを感じた。

ハッとして顔を上げると、いつの間に現れたのだろうか？ 叶利が立っていた。

「もう大丈夫ですぜ！」

咲良の視線に気付いたのか、振り返ってニヤリと微笑^{わら}うと、叶利は眼前の異形をひたと見据える。

「ジャタイ……か」

視線の先でうねくるそれを見て、叶利は確かにそう言った。しかし聞き慣れないその言葉に反応するゆとりは、今の咲良にはない。

咲良を背後にかばうようにして立ちはだかる叶利に、蛇に似たそれは明らかに敵意をむき出しにした。

「オオカミ風情ガ邪魔をスルな！」

言うと同時に威嚇の体勢をとって鎌首をもたげると、見せ付けるように大きな口を開いた。

「蛇に言われたかねえよ」

開けた口からぼたぼたと滴り落ちる唾液を避けながら、心底嫌そうな顔をして叶利が反論する。

狼に蛇。

言われるまで気付かなかったけれど、見れば叶利の頭には犬のような耳が二つ、によつきりと覗いていた。ついでに、咲良の眼前で左右に揺らめいているのは彼の臀部^{でんぶ}から生えた尻尾ではないか。

そう気付いて見上げると、叶利は罰が悪そうに頭を掻いた。

「すいやせん。このことはマスターには秘密にしてください」

それは、咲良に姿を見られたことを指しているのだろう。

アカネが変じた蛇も、叶利が変じた獣人姿も、言ってしまうほどちらも異形だ。しかし、アカネのそれと、叶利のそれとは明らかに性質が違っているように感じられる。

だから、だろうか。咲良には叶利が怖いという思いは微塵も湧いてこなかった。

こくんと力強くうなずいた咲良を横目に、叶利がホツとしたように顔をほころばせると

「恩に着やす」

そう呟いた。

そこで視線を再び蛇へと戻すと、咲良から離れ、一歩進み出る叶利。

「才前モ我に喰わレタイノか？」

そんな叶利に、相変わらず聞き取りにくい言葉でジャタイが問いかける。

その表情は叶利の背後にいてとらえられなかったが、咲良は声の主がにんまり笑ったような気がした。

「馬あゝ鹿。誰が好き好んでお前なんかに喰われるかよ。蛇は趣味じゃねえが、俺がお前を喰う可能性だってあるんだぜ？」

言つと同時に叶利の姿が忽然と消えた。

余りに突然、叶利の姿を見失ってしまった、咲良は戸惑う。

と同時に、今まで叶利で見えなかったジャタイの姿を眼前に突きつけられて、足がすくむ。

何の予告もなくいきなり目の前に蛇がいる格好に陥ってしまったのだから当然だ。

しかし、獲物を眼前にしたはずのジャタイからは、嬉々とした気配が感じられなかった。

それどころか、明らかに狼狽している。

「お前、大口開けて戦闘体勢に入ってた割にやあ動きが鈍いな」

頭上から降ってくるその声に視線を転ずれば、蛇の頭に叶利がしゃがみ込んでいた。

「オのレ……」

言つが早いか頭を思いつきり激しく振ったジャタイに、その動きも予測のうちと言わんばかりに叶利が優雅に舞い降りる。

再び咲良とジャタイとの間に立ちはだかった叶利に、ジャタイが大きな口を開けて飛び掛ろうとした――ちょうどそのとき。

玄関から盛大な音がして皆の動きが一瞬にして止まる。

続いて苛立つように足音を響かせてリビングに現れたのは、実嗣だった。

「叶利！ お前玄関の鍵ぐらい開けとけよ！」

どうやら玄関にロックがかかっていて、蹴破らねばここへ入れなかったらしい。

思いつきり不機嫌そうな顔をして毒づいた実嗣の三白眼が、叶利の姿を見てさらに一層険しくなる。

「叶利、耳と尻尾……」

チツと吐き捨てるように告げられたセリフに、叶利が青くなる。

「あ、ま、マスターこれは……」

しどろもどろで弁解しようとする叶利に、今だ！とばかりにジャタイの口が迫った。

「東山^{ひがしやま}つばみがはらのさわらびの思いを知らぬか忘れたか！」

素早く唱えられた呪^{しゅ}ととともに実嗣の手から放たれた呪符^{しゅふ}が、ジャタイの額に貼り付く。途端、閃光を放って呪符が小さく爆発する。と、同時に下から叶利の拳をまともに食らってしまい、後方へ吹っ飛ぶジャタイ。

ぐつたりと横たわるそれへ、実嗣が歩み寄ろうとした、ほんの一刹那。

ジャタイの姿は三人の目の前から忽然と姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2658b/>

不可視の同居人

2010年10月15日09時12分発行